

Karl Shapiro の *Poems of A Jew* の ユダヤ人の images をめぐって

矢口以文

Karl Shapiro は1913年に、Maryland の Baltimore に生れたユダヤ系の詩人である。彼にはすでにいくつかの詩集と評論があるが、いづれも米国の詩壇で話題的となった。1945年には、*V-Letter and Other Poems* で Pulitzer Prize をえており、現在は Nebraska 大学で教えている。

彼は長い期間にわたって、Jew にテーマをとった詩をかいてきたが、それらをまとめて *Poems of A Jew* という詩集を出版した。1940年に初版が出ている。物事に余りこだわらないで詩をかく彼が、一つのテーマから長い間、離れられなかったという事実は、このテーマが彼の中で余程大切な地位を占めていると想像される。この小論文は、この詩集の中のユダヤ人に関係ある images を通して、彼のいわんとする所を追求しようとする一つの試みである。前半（1—4）は主として、ユダヤ人の意識に連なる images を中心とし、後半（5—8）は主としてユダヤ人とキリスト教会との関係の images を中心として考察した。

1

W. H. Auden 翼下の詩人として Shapiro は当然 Freud の影響下にあると想像されるが、この詩集の後に施している註はこの事実を立証する。詩「脚」、「モンゴル病患者」、「モーセの殺害」に関連し、彼は Freud に言及し、特に「モーセの殺害」は Freud の『モーセと一神教』に基いていると告白している。⁽¹⁾

聖書にはモーセの殺害の記録はないが、Freud の解釈に依れば、モーセはヘブル人達に殺されたのであり、彼の教義はその後で本人の予期以上に発展したのである。⁽²⁾ この殺害は原始集団における原父の殺害の反復である。⁽³⁾ 忘れられてしまっていた原父殺しの記憶痕跡が、この反復に依って呼びさまされるのである。⁽⁴⁾

さて Freud はこのモーセ殺しの体験に関連づけて、ユダヤ人の神経症を

次のように説明する。「過去に体験してあとになって忘れてしまった印象、これこそ神経症の病因にとって大きな意義をもつものだと思うが、これをわれわれは外傷と呼んでいる。⁽⁶⁾——外傷は自分の身体による経験であるか、もしくは種々な知覚であって、大てい見たものか聞いたものにもとずいている。つまり外傷とは経験もしくは印象のことなのだ。」⁽⁶⁾フロイドを正しく解釈するならば、ユダヤ人の外傷はこの民族の中を意識的乃至は無意識的に流れ続けるモーセ殺害の体験の記憶である。

さて、この外傷作用には積極作用と消極作用との二つがある。積極作用とは「外傷をふたたび有効なものにしようとする努力である。したがって、忘れてしまった経験を思いおこさせること、あるいはさらによくいえば、その経験を現実的なものにするのであり、経験の反復をあらためて経験しようとすること」であり、⁽⁷⁾ユダヤ人に関していえば、モーセ殺しを追体験し、ユダヤ人としての意識を回復する事である。これに対して消極的反應とは「これと正反対の目的を追求している。すなわち、忘れてしまった外傷に関して、何一つ思い出させまいとし、また、何一つ反復させまいとしているのである。われわれはこれを防衛反應として綜括することができる。その主な表出は、いわゆる回避であって、これは制止や恐怖症にまでたがまりうる。」⁽⁸⁾

2

さてこの Freud の“モーセ殺し”と“二つの作用”が、Shapiro のユダヤ人意識や神経症を聯想させるいくつかの詩の中に明らかにみられる。消極的反應を多かれ少なかれ表現していると思われる詩を三つの時期にわけて考察してみよう。

「五つの自画像」(Five Self-Portraits) という詩の第一部で、彼は自分の生れた時の事を描いている。「十字架が壁に輝いていた」部屋に生まれた彼が、一週間目にモーセの律法にしたがって、ラビに割礼を施される。割礼を施す事は生れた子供をユダヤ人にする儀式であり、割礼は彼がユダヤ人であることのしるしなのである。シャピロは自分の知らぬ間にユダヤ人に“切り刻まれた”のだ。

私はわんわん泣きながら傷ついて家に帰ったのだ
アブラハムとマリヤに影響されて。⁽⁹⁾

キリスト教の病院に生れて、ユダヤ人にされた彼がわあわあ泣いたのは傷の痛みからだけではない。それ以上にその傷で象徴されるもの、つまりユダヤ人になる事への消極的反應からに外ならない。モーセ殺しを意識する事への抵抗なのであり、また二つの宗教の葛藤から生じてくる精神的な苦しみや迫害への恐怖なのである。彼によれば、この世界でユダヤ人である事は迫害と苦難とを意味するのであり、苦しまぬユダヤ人は異邦人に等しいのだ。⁽¹⁰⁾

この詩は、生れた時の無意識の経験を詩人が解釈したものだろうが、「救世主」(Messias) という詩はもっとはっきり回避と恐怖の消極的作用を表現している。この詩の主人公は赤ん坊ではなくて、物心のついた少年である。彼はある日、薄暗いアパートの一室で詩を読んでいる。その時ドアのベルが鳴る。

金めっきした階段吹抜きの下を彼は凝視した、
そこをユダヤ人の老人が
昇ってきた、東洋風の言葉をしゃべりながら、髭を、
紙の顔のまわりに真黒な後光をつけて。⁽¹¹⁾

この老人が近づいて、少年に面とむかいあった時、少年はドアを開け放し、「名状し難い傷から、恐れのみ逃げ出した」のだ。

もちろん、少年は“Jewish”なものから、自分を Jew と認める事から、さらにまた、Jew にならざるをえない自分から逃げ出したのだ。彼はやがて成長したらそうなるような自分の姿をこの老人の中に見つけたのだろうか。Rosenthal も指摘するように、この逃走は sexual なものと結びついている。⁽¹²⁾ 人間の根本的な所である恥部に傷をもつという事は、彼が根本的な所で Jew であるという事にはかならない。併し未だ Jew としての意識も、Jew である事へのほこりももたないこの少年にとって、この傷は劣等感の対象であり、この上もない恥ずかしいものであり、減多に他人に見せる事のできない秘密である。同じ所に傷をもつこの老人に訪問された時、少年は無意識の内に、秘密がのぞかれ、恥部にさわられるのを感じたのだろう。この少年の中には、sex に結びつく“Jew”的なものに対する恐怖感、嫌悪感をはっきり見出す事ができる。そしてこの回避は実はモーセ殺しを受けいれて Jew になる事からの回避なのである。一見 sexual な割礼は深い所においてモーセと結びついているのだ。

最後に母が帰ってくる。すると彼女は、家の中に、少年ではなく、のっそり大きな老人が

——単音で何かをぶつぶつ読経し、
聖地のために寄附を頼んだ
学者の手でパン屑をぼろぼろ砕いているのを

見つけるのだ。逃げた少年の未来がこの老人の中に暗示される。少年は逃げて、外をさまよっている。併しやがて、“こんな”ユダヤ人になるために、「部屋」に帰ってくるのだ。所で、Slotkin がこの老人の中に、約束された故郷を作ろうとして作る事のできない忠実な巡礼者の姿を見、彼が相変らず stranger である事と、外に逃れた少年との間に、Shapiro の ambivalence を見出している。⁽¹³⁾

外に逃れ出た少年の中に、さまよえるユダヤ人の姿の投影があるというのだ。つまりここには自分をユダヤ人と意識しないユダヤ人の姿があるのだ。逆に老人の中には、ユダヤ人を意識したユダヤ人の姿があるのだ。

詩「初めて」(The First Time) の中では、sexual な色合がもっと表面に出ている。青春期の少年の経験が取りあつかわれている。彼は売春婦の所に行き、始めて性の手解きを受ける。「この少年は、未だ17かそこいらで、/何をなすべきかも知らないで、自分の服を脱ぐ、/医者待合室で人々がそうするように。」併し初めての経験でさり、しかも恐らく裸かになって、あの割礼の所をみられる恥しさにわれを忘れる。裸かになって、

それから恐怖と恥しさの横波の中で
愛がヒステリックに燃え尽きてゆくのを感ずる。
ろうそくが泳ぎ下って無になり
自分の炎の濡れた突風に消される⁽¹⁴⁾。

このように熱がさめ、自意識に促われている少年を、売春婦の少女は肩ごしに見ている。少女は

それから振りかえる、机に向かうように、
そして彼を見て、余りにあからさまに、余りに突然、

そしてほとんど優しく尋ねる、「あなた、ユダヤ人なの？」⁽¹⁵⁾

このように、少年が懸命に隠そうとしていた恥部が非常に簡単に少女に暴露される。それは少年の最も恐れていた質問なのだ。最も深い所にある秘密、最も痛く疼く傷に、少女は無造作にさわる。少女の「ほとんど優しい声の質問は」、その言葉の調子の優しさとは全くうらはらに、彼の意識に鋭いナイフのように突きささる致命的な、最も残酷な打撃なのだ。

この少年も自分の割礼を、つまり Jewishness を隠そうとする神経症状を明らかに表わしている。Freud のいう消極作用と密接に関係していると思われる。

3

さて、積極作用はどのようなイメージと結びついているだろうか。積極作用の最良の典型は「モーセの殺害」である。前述もしたが、このテーマは、Freud のモーセ殺害説を下敷きにしている。この詩の中で、Shapiro はユダヤ教への最も積極的な信仰を表現している。

この詩は旧約聖書に記されているエジプト脱出の事件が背景である。ヘブルの民達がエジプトのパロの下でくびきにつながれていた時、モーセに引き入れられ、エジプトの地を出て、ヤーウェと契約を結んだという物語りである。まずモーセにしたがってゆくヘブルの人達の心の頑迷さがとりあげられる。

絶望のゆえに私達はあなたのあとを出発し
火の柱には疑いのようにしたがった。
信仰を続けるためにしるしを望んだ、
つえも疫疾の奇蹟も
自然現象と呼んだ。⁽¹⁶⁾

それから、ヘブルの人達は指導者の「素性を討論」したり、ヨセフと比べて、彼を軽蔑したりした。やがて憎しみが生れる。

私達は毎日あなたを憎んだ。私達の子供達は死に、水がこぼれた。
恰もあなたが私達を一人づつ失くそうとしているかのようにだった。

私達の流離はあなたの心の流離のようだった。
私達を疲れ知らずだと雲は信じた。
私達は軽蔑と倦息をあからさまに表現した。⁽¹⁷⁾

そしてこの反逆がやがては偶像崇拜にまで至るのだ。出エジプト記第32章は次のように表現されている。

最後にあなたは岩山に昇った。遂に帰ってきた。
あなたが山から下ってきたのを私達が見た時、あなたの皮膚が輝き、
私達の律法の石々は光っていて、
私達は動物のように逃げ、踊り手達は散々に散った。

私達は見守った、あなたが子牛を火にひっくりかえすのを、
あなたが岩の上の板を壊した時私達は隠れた、
私達が金と水との混合物を飲んだ時、私達は泣いた。
私達はあなたが道に迷うか、私達を離れればよいと前から願ってきた。
この日は私達の最大の汚れの日だった⁽¹⁸⁾。

併しこの反逆の彼らのために、モーセはとりなしの祈りをしたり、元気づけてくれた。そのモーセを彼らは殺害してしまった。モーセは約束の土地に軍をひきいて入ってゆく事ができなかった。最終聯で、モーセ殺しの彼らが後悔し、彼を次のように讃える。

あなたは人間で、曾ては殺人を犯したけれども、
あなたは契約の責任を身に帯びた。
世界のため、私達の理解のために話してくれた、
神との対話があなただを思索家にし、
私達に早くから義を教え、民族にした。⁽¹⁹⁾

この詩の中で詩人はモーセに反逆する民の一人になっている。彼はエジプトから出てきたヘブルの民達と共に行動し、つぶやき、憎み、子牛を拝み、逐にはモーセを殺したのである。この民達と共に罪を犯した彼は、このモーセの殺害を通して、共に悔い改め、神と親しい関係に入ってゆくのである。

この詩は、ユダヤの民達が神と契約を結んだ後に、年毎に行ったと信じられている契約更新 (Covenant renewal) の式の recital を聯想させる。例えばヨシユアがシケムに、イスラエルのすべての部族を集めて行ったように、神の前で、神が彼らの祖先に行った歴史を recite、彼らが神秘的に先祖の経験に参与する。その事によって、彼らは神の働きを体験し、自分達の罪を認識し、先祖と神との間に結ばれた契約を自分達のものにし、ユダヤ人である事を確認するのだ。⁽²⁰⁾

併しこの詩では、詩人は神秘的にモーセ殺しのユダヤ人と一つになり、モーセ殺しを追体験し、悔い改めて神を意識し、ユダヤ人を意識するのである。

この詩の中には、ユダヤ人である事を回避しようとする消極的な作用はもはやない。この消極作用と積極作用の葛藤と、積極作用の勝利のテーマが「イスラエル」(Israel) の中でとりあつかわれている。この詩はパレスチナの解放が契機として書かれた事になっている。シオンの戦いの事を考えると、飛んでゆきたいが、「ただ僕は西洋のいすの中で鎖につながれている」のだ。併し遂に「僕は僕の名を / 初めて大きな声で無意識に口ずさむのだ。」ユダヤ人から逃れようとしていた人間、例えばあの逃げ出した少年や、売春婦の前でユダヤ人のしるしを隠していた少年が、今や自分の名を大きな声でいうのだ。ユダヤ人をこのように意識した人間が最終聯で、高らかに歌い出す。

百万の人々の耕作の事を
もう話すな。道行くイエスに
「もっと速く行け」と悩ませたものの
邪悪な神話の事はもう話すな。
黄色いバッヂ、悪いグループのしるしの事をもう話すな。
生きている国土の名の事丈を話せ。⁽²¹⁾

過去の事ではなくて、今始った希望に眼をむけ、ユダヤ人である事を意識して、積極的に生きようとする気概がある。しかもこのスタンザにはあのユダヤの終末論的希望さえある。古い時が始まり、新しい時が始ったのだという喜びである。もとよりこの希望は Jew を意識しているユダヤ人達によりもち続けられてきたものだ。恐らく外的には、このパレスチナ解放の中にその希望を発見するのだが、対内的には、新しい時は、消極作用に打ち勝って、

自己がユダヤ人である事を認識する時に始まるのである。奇しくもこの詩では両者が同時に起っている。

同じテーマが、昔手折っておいた花が戦争の死と恐怖の時に、本の頁からこぼれおちたという「五つの自画像」の第五部の物語りの中にもある。また、「汚い言葉」(The Dirty Word) は、子供時代の消極作用を大人になってから悔いをもって回顧しているのがテーマである。また、切られたものを取り扱っている「脚」(The Leg), 「モウコ病患者」(Mongolian Idiot) も、ユダヤ人の積極的面に関連している。「脚」の主題は、Shapiro に依れば切られたものさえも完全であるという事である。⁽²²⁾ 「切る」という事は割礼やモーセ殺しを連想させるかもしれないが、同時に“Jew”から逃走している Jew を refer もする。「モウコ病患者」も同様である。Slotkin は、この詩において Shapiro が最も積極的な、劇的に宗教的な用語でユダヤ教への考えを述べているといっている。⁽²³⁾ 知能の遅れにモウコ病患者や、神経症の患者にも、“Jew”を意識した Jew は、家族の一員としてうけいれ、愛を注ぐというのである。

4

それでは Jew とは一体何だろうか。Shapiro 自身は次のように説明する。「ユダヤ人であるという事はユダヤ人である事を意識する事であり、ユダヤ人である事は、宗教をもっていようといまいと、意義ある事実である。このユダヤ人である事を受けいれれば、そのユダヤ人は人類の中でユニークであり、ユダヤ人という言葉は永遠のショックを保持する。そのショックはキリストとか十字架に関係したものでなくて、契約、つまり、ユダヤ人と神との親密な関係に関連している。」⁽²⁴⁾ ここで彼は極めてユダヤ的思想を展開する。フロイド流にいうと、モーセ殺しの経験に参与する事によって、ユダヤ人を意識する事であり、積極作用である。

Shapiro は続ける。「二十世紀に入ってからドイツ人によるあの物すごいユダヤ人に対する血なまぐさい迫害は、世界中にユダヤ人の精神的イメージをよみがえらせた。高貴で善い人であるとか、軽蔑すべき悪人とか、西欧の宗教の始祖とか、キリストの殺害者とかとしてのイメージをではなく、国籍を越えて、歴史の押しつぶすような非人格性に対して無防壁の、本質的に人間自身としてのイメージをである。併し現代のユダヤ人は、ユダヤ人である限り、非妥協的であり、感謝せず、なまの可能性の中にいる人間として存

在し続ける。」⁽²⁵⁾

この辺の事状にも関連し、Slotkin は Shapiro のユダヤ人観を次のように解釈する。「シャピロにとって、ユダヤ人は、この世的な苦しみ、受難、屈辱や喜びを通して、自己の本質に、現代人に、神との親密の関係の人間に還元した。ユダヤ人と神との親密さは感情的には現実ではあるが、それは非友好的なものだ。何故ならそれは神が創造してくれたこんな世界——光りと色と夢と本源的人間の悲劇的屈辱との世界という現実的認識の上に成り立つからである。」⁽²⁶⁾つまり、ユダヤ人が神を認識するのは、極端にいうと迫害を通してなのだ。フロイドに依れば、このユダヤ人迫害の原因は、原父殺しに関係がある。ユダヤ人達は「ユダヤ人のほかに、エジプト人、ギリシヤ人、シリヤ人、ローマ人、ついにはまたゲルマン人をもふくんでしまった新たな宗教共同体から、彼らこそ神を殺害したのだ、という非難を聞かなければならなかった。」⁽²⁷⁾

もちろん、これはキリスト殺しについていわれているのだが、彼に依れば、それも結局は原父殺しに連なるものであり、そのユダヤ版はモーセ殺しである事はすでに述べた。⁽²⁸⁾

迫害の原因がここにあるとするなら、迫害のたびに、彼らはモーセ殺しを思い出さざるをえない。だからこそ、Shapiro は、suffer しないユダヤ人はユダヤ人ではなくて、異邦人だというのであろう。

このように、suffer する事に依ってのみ神との親密な関係に入る事ができるのなら、その関係は非反動的にならざるをえない。「詩篇第 151 篇」は一見、神を小馬鹿にしたようなおかしな内容の詩だが、この見地から読む時に彼の立場がはっきりしてくる。アメリカにユダヤ人達がやってきてからの三百年を記念する祭りのために作られたのだが、それはざっとこんな調子だ。

あなたは私達を深しているんですか。私達はここにいますよ。

あなたは花々を集めていたのですか、エロヒムよ。

私達があなたの花なんです、いつでもずっとそうでしたよ。

いつ私達を一人にしてくれますか？

私達はアメリカにいるんです。

もうここに三百年もいるんですよ。

どんな新しい祭壇に私達を飾ってくれますか？⁽²⁹⁾

5

私たちは迫害ということに少し許り言及したが、これは彼の詩の中で大切な要素の一つとなっている。あの淫売少女の「あなたはユダヤ人なの？」という問いかけは、結果的には少年への心理的な迫害であるが、ヨーロッパ・アメリカ社会におけるユダヤ人迫害はあらゆる領域とあらゆる時代にわたっているのは衆知の事実である。

西欧の文学は憎しみと皮肉をこめて Jew の貪欲と非キリスト教的態度をテーマにする。例えば *Merchant of Venis* のシャイロックである。ところでシャピロは、このシャイロックについて、独自の解釈を施している。それによれば、シャイロックは貪欲でなく、憎悪を代表する。それは彼らユダヤ人たちに対する有形無形の迫害への憎悪であり、この事件で勝ったのは実はシャイロックなのである。詩「Shylok」の最終聯で、

バルタザーの論理はまったく失敗するだろう
天の裁きの審問では。⁽³⁰⁾

と彼は宣言する。

キリスト教社会の Jew に対する迫害の現実が、あるとき、なにも世間を知らないナイーブな少年に、突然あらわになる。「主よ、私は余りに多くを見すぎだ」(Lord, I Have Seen Too Much) の中にある image である。

余りに突然、この稲妻があらわれた。
主よ、ある日、地獄の真空、
血の口、大洋の野性のままの顎など、
エデンから東に住むように追放された
惨めなアダムがみたよりもっと多くのものを、
神の情欲がぞっとあばいた！。⁽³¹⁾

この迫害のクライマックスはナチによるそれであり、シャピロの詩でも迫害の image のクライマックスは、ナチによる迫害をテーマにした「現象」(*The Phenomenon*) であろう。この中で黒い雪降りが二度あるが、註によれば、最初のはヒットラーの勝利を意味し、二度目はドイツの破滅を意味す

Karl Shapiro の *Poems of A Jew* のユダヤの images をめぐって

る。⁽³²⁾ 二番目の雪降りは次のように表現される。

それから再び黒く雪が降った、そしてそれが落ちている間、
あなた方は太陽が、炎症を起しているへりが、
煙りの中を旋回しているのを見ることができた。それぞれが自分の
浅い地獄から
傷ついた幻がだんだんおぼろになってゆくのを経験した。⁽³³⁾

次の最後の聯は、彼も註で述べるようにナチの残酷をもう忘れようとして
いる歴史への警告である。⁽³⁴⁾

しかしある日すべてが明らかになった、そして間もなくある日、
それを目撃した人々が死ぬよりもっと早く
自然自身がその現象を忘れたのだ、
誤って降らした雪がもの見事にそれを打ち消したのだ。⁽³⁵⁾

そして、このような迫害はときの終りまで続くだらうと彼は断言する。

ユダヤ人の字は暗闇の心を
七通りに切り刻む踊りのナイフだ。
これらはすべての人々が拒否する字だ、
彼らは拒絶するだらう、王がやってくるまで、
彼らは拒絶するだらう、時が死に、
すべてが昔の本に転りかえるまで。 (アルファベット) ⁽³⁶⁾

時の終りに、神から遺される王がやってきて、この世を裁き、始めのとき
のようにこの世に秩序を与えるようになるまで、ユダヤ人は拒否されるの
だ、と言う。ここにユダヤの民に対する迫害の現実がある。

6

Shapiro によれば、このヨーロッパ社会における Jew 迫害はキリスト教
会によって行なわれた。「アルファベット」の中で、「ユダヤの字は黒くて清
らかで / キリスト教のページの上に鎖のひもにつながれて横わっている」と

言っているが、このキリスト教の創始者イエス・キリストのことを、「ファイリング・キャビネットの中の十字架」(The Crucifix in The Filing Cabinet) の中で次のように描く。彼は引きだしの中から、珠数のついた鎖付きの十字架をとりだし、それを自分の掌の上におく。すると、

それは石ころの

小さなつかのように積み重った、その上に

年をとって弱った木が立ち、その木の上で

ある昔の先生が自分の手でぶらさがっている。(37)

ユダヤ人たちにとって、キリストは神の最高の啓示ではない。彼は一介の昔の教師にすぎない。神の子としてユダヤ人たちに殺されたのではなくて、自分でぶらさがって死んだのだ、とシャピロは言う。それにも関わらず、キリスト教徒たちはユダヤ人を迫害してきた。この迫害の苦しみを、シャピロはあの旧約の時代に、エジプトの王パロから受けた迫害の苦しみと比較する。

私はユダヤ人たちに縫われたピロードの袋をみつけた、

それには、パロの時代に行なわれた大きな悪の数々を

思いだすための聖なるショールや祭壇の

掛け布や朝に腕を縛る皮ひもが入っていた。この十字架を

私はこの小袋の暗闇の中におとした、

考えが考えに、鎖が鎖にもつれた、

時が貪欲な顔をした暗闇をほどき、

十字架を崩壊し、草ひもの血管に血を流すまで。(38)

パロの悪事を思いだすためのものをいれてあるピロードの袋の中に、十字架を入れたということは、キリスト教徒が行ったあのパロの悪事にも匹敵する残酷な仕打ちを、パロのそれと同時に、いつまでも思いだし、呪うということなのだろう。紀元前千五百年か六百年ころになされたと思われるパロの仕打ちを、いまも思いだし、決して忘れないように、キリスト教徒のそれも決して忘れはしない、というのだ。ユダヤ人に対する迫害のいかに苛酷であったかが想像される。そして同時に、この詩には、ユダヤ人たちの敵に対し

て抱き続けているすさまじい許りの敵意と憎悪の執念がみられる。

このようなキリスト教徒の集まるキリスト教会は、ユダヤ人たちにとってはぎまんであり、幻影である。だから Shapiro は、キリスト教徒に帰依する者を嫌悪をもって眺める。詩「帰依者」(The Convert) は、おそらくユダヤ人のカトリック教会か英国正教会への帰依が主題である。回宗は「理性を幽霊に降参させる」ことであり、馬鹿げた、理性に合わぬことの勝利を意味する。「岩から生えでてくるどんな神秘的なばらも / この敗北より奇蹟的だろうか」と問いかける。それはまったく狂気 (insanity) のさたなのだ。一旦回宗したら、彼はもういかげんな態度で聖書を読むことはできない。かつては詩であり、教訓であり、日常茶飯事のことであったのが、いまでは身をもって守らなければいけなくなったと皮肉くる。

実際、Shapiro はこの詩集の序の部分で、「私は二十世紀の福音伝導と芸術家たちやインテリたちの宗教への墮落を、嫌悪と落たんをもってみているものの一人である」と言っている。⁽³⁹⁾

教会批判は「堅信礼」(The Confirmation) のテーマでもある。堅信礼はキリスト教会の儀式の一つであり、幼時洗礼を受けた者たちが、ある一定の時期に神に対する献身を誓い、信仰を確認する式だが、Shapiro はこれを少年の性の眼覚めと結びつけて解釈する。第一聃は教会の中のシーンで、少年がほかのものと一緒に堅信礼を受けている。母たちは感動して涙を流し、父たちは誇りで胸をはっている。ところでその少年の昨夜の出来事が、第二と第三の聃で描写される。

昨夜夢の章の中で、
写真が引きだしの中でいまだ罪を重ねているとき、
少年は眼覚ましたのだ。月の光りが庭の中で
真直な毛深いたちあおいと
ピンクで硬いばらの蕾とを照していた、
そして堅い壁の上に
映画のような四角い光りが落ちて
たちあおいとばらのように夜の中に
裸体の女優を浮きあがらせた。⁽⁴⁰⁾

少年の見たのは実際はたちあおいとばらなのだが、彼には真直に立ってい

る裸の女優にみえたのだ。この女優を夢の中で抱く。すると

——聖なる油のように滑らかな油が
容器の縁の唇からこぼれおちた
祭壇の布の上に。
イースターの少年たちのように血が彼の頭の中で歌い、
夜中 獣脂の玉が
涙のようにベッドの中で乾いた。⁽⁴¹⁾

これは実にたくみな夢精の image だが、「聖なる油のように滑らかな油が / 容器の縁の唇からこぼれ落ちた / 祭壇の布の上に。」の image は、そのまま堅信礼の式で使われている道具の image とダブってくる。教会の中の聖なるものを夢精の image でダブらせて、その「聖」を汚すのだが、このあたりの皮肉たっぷりの彼の image 作りの腕は確かなものだ。少年は教会の中で、容器や油や祭壇の布をみて、昨夜の出来事を連想しているのだろうか。最終群も皮肉たっぷりの批判である。

僧侶よ、二重に誇れ、
一つは少年のばらへの情熱のために、
一つは自己解放した彼の肉体のために、
そして高らかに彼女のことを語れ、
喜びの完全な意識の中で
電気の光りの中に裸で立って
隠されていた少年を眼覚せた彼女のことを。⁽⁴²⁾

このような教会批判は「ユダヤ教会堂」(The Synagogue) にもみられる。また、「尼たちをからかう」(Teasing the Nuns) の中では、十字架は hawk にたとえられている。

直接、シャピロの攻撃の対象になっているのは、カトリックや Episcopal のような high church であり、特に国教会であるように思われる。なぜなら、それらはいつでも加害者であり、国の制度であるからであり、それらの下で圧迫されてきたユダヤ人のそれらに対する共通の感情を彼は代弁しているのである。

7

彼の詩集の中で、最も大切な images の一つは流浪のそれである。詩「私の祖母」(My Grandmother) は、年老いて、やがて死んでゆこうとする祖母への感慨をうたった美しい詩である。生涯、休まるひまなくさまよいつけた祖母にむかって、彼はしみじみと憐れみを感じている。

私は彼女の死の生涯を、彼女自身の苦しみを憐れむ、
だけどとりわけ、歴史が異国から
異国へ、多くの家から家へ移動させ、
彼女の流浪を当然のこととなし、彼女の
子供たちの言葉と仕事をごちゃごちゃにしたことを憐れむ。⁽⁴³⁾

この亡命ないしは流浪の image は決して Shapiro によって始めて開拓されたものではない。Beach によれば、現代社会において、戦争とか機械文明とか、社会不安とか、人種偏見のために、かなりの多くの詩人たちが精神的にさまよえる者なのであり、その image は二十世紀では特に W. H. Auden の詩の中で顕著である。⁽⁴⁴⁾ Shapiro は技法的にはいわば Auden の門下にあり、流浪の image は Auden のそれによって影響されたか、触発されたかと想像される。Shapiro の「さすらい人の旅話し」は次のような image をもっている。

忘れずに覚えておきな。この空を見上げよ。
海のように澄んだ空を深く深くのぞきこんでみな、
なににも妨げられないところ、祈りの終点を。
さあ、話すんだ、神聖な丸天井に話しかけるんだ。
なにか聞える？ 空がなにを応えてくれる？
天はとられている。これはあんたの故郷じゃない。⁽⁴⁵⁾

これは第一聯だが、第二聯と第三聯ではそれぞれ、海にも、大地にも故郷がないと言っている。

ところでこの詩の第一聯の二行目は「Look deep and deep into the sea-clean air,」で、これは Auden の詩「さすらい人」(The Wanderer) の冒頭

の「Doom is dark and deeper than any sea-dingle」（運命は暗く、どんな海の谷より深い）を連想させる。⁽⁴⁶⁾ それは d の音、特に deep という言葉に関係しているものと思われる。また、Shapiro の方の四行目の dome の中に doom の echo を感ずるのは読みすぎだろうか。

ともあれ、Auden のさすらい人は、家を離れ、妻を離れてさすらいのである。しかしながら、もしたとえ Auden によって触発されたとしても、また、技巧上の影響を受けたとしても、Shapiro のさすらい人は Auden のそれとは一線を画するのである。つまり Auden のそれには家があり、妻があって、やがては仕事が終わって、帰郷することが可能性として暗示されている。それに対して、Shapiro のさすらい人はもっと本質的であり、いわば根っからのさすらい人なのである。空にも、海にも、大地にも、帰るべき故郷がないのだ。永遠のさすらい人なのである。紀元一世紀から、国なしにさすらい続けたユダヤ人の運命が暗示されている。

このように、この旅人の日記のような、なにげない感想を表現しているかのようなこの作品は、実は静かな悲しみとあきらめと怒りとをこめて、ユダヤ人たちの休むことのできぬ旅から旅へのいつ果てることないさすらいの生活を描写しているのだ。

8

彼らはヨーロッパの社会をさまよいつけてきた。しかしアメリカにきてから、彼らはかつて味ったことのない自由を味わうことができるようになったのである。この国には宗教的な緊張関係がない、と Shapiro は述べる。⁽⁴⁷⁾ この国の社会は pluralistic であり、一つの宗派が国教であるというようなヨーロッパ的伝統は存在しない。「アメリカではすべての人々が訪問者なのだ」⁽⁴⁸⁾ と彼は言う。彼は続ける。「すべてが永久に訪問者であるこの国では、ユダヤ人は、完全にユダヤ人であることを意識して生きてゆけるという、まれな立場にある」⁽⁴⁸⁾ と。

したがって、このようなすべてが訪問者であるような国の文学のテーマは rootlessness である、と彼は言う。《The great theme of American literature is rootlessness》。⁽⁵⁰⁾ すべてが strangers であり、ヨーロッパ的な伝統の存在しないアメリカは、正にその故にこそ Jew たちには at home な意識を与えるのである。だからこそ Shapiro にとって、アメリカの中のヨーロッパ的なものには我慢がならない。例えば Henry James と T. S. Eliot に

ついて、彼は次のように述べる。「二人の有名な作家、Henry James と T. S. Eliot は、過去を捨てることを拒否し、記憶に固執して、自分たちの国籍を捨てて、ヨーロッパの文化が優っているという考えを受け入れた。彼らは再びヨーロッパ人になることによってのみ、ヨーロッパとの連続的関係を維持することができた」。⁽⁵¹⁾ 同様に彼は Pound や Auden を攻撃する。アメリカの英文学については、「英文学はアメリカでは死んだ文学、追憶だ。英語は実際、追憶だ。英語と英語の偉大な文学がわれわれのとつながっているなんてふりをする英文学の教授は、この国にはほんの少ししかいない」⁽⁵²⁾ と主張する。

Shapiro の詩にみられる痛烈きわまるアメリカ批判は、主としてアメリカの中のヨーロッパ的なものに関わっている。この詩集では特に「大学」(University) や「ワシントン大寺院」(Washington Cathedral) の中に皮肉な批判が見られる。上述の、英文学と米文学とが続いていると主張するに類する連中を、詩「大学」の中で、彼は次のように描く。

学部長たちは家に伝わる器具をのぞきこむひからびたオールドミス
たちで、
イギリス風の名前を硬貨のように鳴り響かせる。⁽⁵³⁾

イギリスの古いものならなんでもありがたがる“お偉方”への痛烈な皮肉がある。若い、自由なアメリカでは、古いヨーロッパ的なものはおよそ似つかわしくないのだ。それにそれらは、Jew にとっては忌しいものなのだ。なぜならそれらの一つ一つに Jew 迫害の前科がくっついているからであり、それらがアメリカで大手を振って歩くときは、Jew にとって住みずらい時代になるかもしれないからだろう。

9

以上、『ユダヤ人の詩』の中のユダヤ人に関係ある images を通じて、Shapiro の言おうとしていると思われるものを追求しようと試みた。それによれば、Jew は Mose 殺しを認め、Jew であることを確認することによって unique であり、その uniqueness は神との intimate な関係の中にあつた。しかしその intimacy は Jew のおかれている現実の故に、unfriendly なものであつた。また、Jew と認めるに至る過程の中で、神経病的症状を呈する

消極的反應があるのもみてきた。

この消極的反應は現実にはユダヤ人迫害に関係があり、この迫害はキリスト教会とその社会の産物であった。実際、キリスト教会とその社会は Jew たちの憎しみと攻撃の対象であり、彼らはその迫害の故に exile の生活を送らねばならなかった。Shapiro の批判はいつも Jewish Exile としてなされた。

さて、モーセ殺しのフロイドの理論は、いまではごく少数の人々にしか受けいれられていないと思われるが、その他の Shapiro の態度は彼の属する民に共通のものである。彼のキリスト教とその社会批判は、正しいかどうかということは別にして、それはユダヤの民の二千年にわたる現実体験に根ざしていると言う事が出来るだろう。

註

テキストは Random House, New York, 1958 年版である。

1. *Poems of A Jew*, pp. 70-71.
2. フロイド著、土井、吉田訳『幻想の未来』日本教文社、p. 167.
3. 『同書』, p. 228.
4. 『同書』, p. 248.
5. 『同書』, p. 202.
6. 『同書』, p. 205.
7. 『同書』, p. 207.
8. 『同書』, pp. 207-208.
9. *Poems of A Jew*, p. 34.
10. cf. Decolonization of American Literature by K. Shapiro, *Wilson Library Bulletin*, June, 1965, pp. 851-852.
11. *Poems of A Jew*, p. 23.
12. *The Modern Poets* by M. L. Rosenthal, N. Y. 1960, p. 259.
13. The Contextual Image: Karl Shapiro's Image of 'The Jew', by Richard Slotkin, *American Quarterly*, Summer 1966, p. 223.
14. *Poems of A Jew*, p. 28.
15. *Ibid.*, p. 29.
16. *Ibid.*, p. 53.
17. *Ibid.*, p. 53.
18. *Ibid.*, p. 54.
19. *Ibid.*, p. 54.
20. ヨシュア記第24章、『旧約聖書』, pp. 335-337.
21. *Poems of A Jew*, p. 4.
22. *Ibid.*, p. 70.
23. cf. The Contextual Image by K. Slotkin, p. 225.
24. *Poems of A Jew*, pp. ix-x.
25. *Ibid.*, p. x.

26. The Contextual Image, p. 220.
27. 『幻想の未来』, p. 302.
28. *Poems of A Jew*, p. 70.
29. *Ibid.*, p. 6.
30. *Ibid.*, p. 56.
31. *Ibid.*, p. 19.
32. *Ibid.*, p. 70.
33. *Ibid.*, p. 11.
34. *Ibid.*, p. 70.
35. *Ibid.*, p. 11.
36. *Ibid.*, p. 3.
37. *Ibid.*, p. 46.
38. *Ibid.*, p. 46.
39. *Ibid.*, p. ix.
40. *Ibid.*, p. 25.
41. *Ibid.*, p. 25.
42. *Ibid.*, p. 26.
43. *Ibid.*, p. 49.
44. *Obsessive Image*, by J. W. Beach, edited by W. V. O'connor, Minnesota, 1960, p. 143.
45. *Poems of A Jew*, p. 18.
46. *Poems* by W. H. Auden, Faber and Faber, p. 43.
47. *In Defense of Ignorance*, by K. Shapiro, p. 215.
48. *Ibid.*, p. 214.
49. *Loc. cit.*
50. *Wilson Library Bulletin*, June, 1965, p. 845.
51. *Loc. cit.*
52. *Loc. cit.*
53. *Poems of A Jew*, p. 12.

supply of the United States in 1936.

They are concerned in part with the internal behavior of the quantity and velocity of circulation of the money supply itself with its trends, seasonal patterns, amplitudes of fluctuation and the like; and in part with the relations between the money supply and such things as prices, industrial production, national income, security transaction, etc.

The most significant conclusion in his analysis is that currency and deposits apparently move with or after, but not before, the several measures of general activity, and hence are a passive rather than an active factor at the start of the changes.

In this paper I emphasize the relativity of the rate of interest and the circular velocity.

An Economic Cycle Explanation beyond the Cobweb Theorem

Tadashi (Gan) WATANABE

Economists tend to explain economic cycles by disequilibrium within an economy. The best known case is the cobweb theorem. However, the relationship of business cycles to non-economic factors such as the cyclical nature of solar activity is most important. The statistical evidences are presented.

The Study of Images of Jews in *Poems of a Jew* by Karl Shapiro

Yorifumi YAGUCHI

This paper treats images of Jews in *Poems of a Jew* by K. Shapiro. Through analysis of the main images there, the writer tries to identify Shapiro's views on Jews and the world in which they have lived.

The former half (1-4) is devoted to the study of images of Jewish consciousness. They are studies in connection with Freud's concept of Judaism. According to Freud, Moses was killed by Jews and there are two reactions to this murder on the part of Jews. One is the positive reaction and the other is the negative. Images of these two reactions are found in Shapiro's poems. His concept of Judaism is also pursued. His idea of Jews' relationship to God is explained.

The latter half (5-8) is devoted to the study of images of the Jewish relationship to the Christian world. Representations of the Jews' sufferings, of their exiles, of Shapiro's views of Christian churches, and of his social criticism are taken up.

Death and Life of *The Red Pony*

Ikuzo TANAKA

Studying Steinbeck's works which were written in California, we detect one major motif: glorification of life. To study his view of life, I have selected *The Red Pony*, which, I think, indicates the motif most simply and clearly. *The Red Pony* consists of four stories. Each of them has its own theme and together they make up one design. I have tried to see each theme and the relationships.

Two Aspects of *The Winter's Tale*

Shozo TAKAHASHI

There are two aspects in life. One is the aspect of darkness and the other brightness. In this play, these are well matched and each individually developed in the various experiences of life.

Leontes' jealousy, representing the greatest problem of the human mind, shows the aspect of darkness. In his malice, we find some much significance, such as Sin and Death, and Nothing and Justice. The symbolism of Perdita, Hermione's grace, and Autolycus' humour show aspects of brightness, such as love unchangeable in distress, purity and sincerity of human nature, and a firm determination to overcome human vices.

In this play, Shakespeare shows the most malicious mind and despicable deeds, and at the same time he skillfully describes the most graceful.

Studies in the Refraction Found in New Testament Translations

Kunio KATO

Presupposing the necessity of thorough study of the Old Testament, the writer tries to find 'refraction' in such as Latin, French, German, and English.

Then reading through the Syriac Version, (the Peshitta,) the writer